想

沖縄県立開邦高等学校二年　金城　陽詩

二〇二〇年七月、中学三年生だった私の元に一通の封筒が届いた。差出人は、心当たりのない女性だった。「拝啓、突然お手紙差し上げます。六月二十九日の琉球新報『声』の欄を拝読致しました。」私が平和学習を受けて書いた感想がたまたま新聞に載り、それをお読みになった方がわざわざ私にお手紙を送って下さったのだ。それが玉木さんとのやり取りの始まりだった。封筒の中には、お手紙と一緒に一冊の青い冊子が入っていた。表紙には、「少女十歳の戦争体験―戦禍の中で―」そう書かれていた。

四十ページほどの冊子の中には、玉木さんが経験した沖縄戦の「すべて」が書かれていた。上空を飛び続ける戦闘機としきりに降ってくる爆弾の音や色。破壊され続ける街の見たこともないような景色。医師であった父との最後の時間。一人、また一人と、同居家族九人全員と死に別れてしまう過程。七十七年前のあの夏の全てが事細かに記されていた。

「農道といい、畑や原野至る所に死体、死体、死体である。死体は様々だ。真黒に腐敗し膨れ上がった死体、真夏の灼熱の太陽の下で直に腐敗し死臭を放つ。死体は転がっているというより折り重なっている状況である。」

私は小説を読んでいるのかとさえ思った。けれども、文章中に出てくる見知った地名と、今までの平和学習で目にしてきた当時の写真のおかげで、映像ははっきりと頭の中に浮かび上がってくる。これがたった十歳、本来なら休み時間に外でドッジボールや鬼ごっこをして騒いだり、唐突に無茶なことをして親や先生に怒られたりするはずの十歳が巻き込まれた出来事なのか。そう考えると言葉が出てこなかった。もちろん今までの平和学習でも似たような表現の文章は何度か読んできた。当時の景色も何となく知っているつもりでいた。けれど、十五歳になり十歳という年齢を幼く感じるようになった時、私はやっとその事の重大さに気が付いた。玉木さんは私への手紙にこう書いていた。「自分の十五歳、二十歳にどんなことがあったか全く思い出せないのですが、あの十歳の夏の戦場は何時でも昨日の悪夢の様に鮮やかに思い出されるのです。」七十七年経ってもなお昨日のことのようによみがえってくる幼き日の光景。それが私たちが知らないまま消え去っていくと、この島の「平和観」はどうなってしまうのだろう。

私には十四歳で沖縄戦に巻き込まれた曾祖母がいた。曾祖母は私が幼い頃から自分の戦争体験を話してくれた。けれど、私が知っているのは「誰々が爆弾に当たって亡くなった」「どこどこまで長い距離を歩いた」というような話ばかりで、当時の細かい状況を聞いたことはなかった。私は幼かった故に自分が聞くのが怖くて、そして幼いながらに曾祖母を傷つけてしまいそうで、あの時の様子を鮮明に描写してほしいとはお願いできなかった。もっと詳しい話はもう少し大きくなってから聞けばいいと、そんな風に思っていた。しかし、曾祖母は私が当時のことをもっと詳しく聞く前に、逝ってしまった。今の私には、私が想いを感じ取っていた曾祖母のあの目を、あの表情をそのまま誰かに伝えることはできない。他の人が聞けばきっと「へぇー、そうだったんだ。」その程度で終わってしまいそうなことしか話すことができない。何もできないまま、家族としても、戦争体験者としても、大切な人を失ってしまったと、そう後悔した。だからより一層、私が曾祖母に聞くことのできなかった事が細かく描写されたこの一冊が、大切になった。

私は毎年学校で行う平和学習を前にして、自分自身を無力な人間だと感じる。毎年似たような内容を学ぶ平和学習の後には、たいてい皆「戦争はしてはいけないと改めて思いました。」「自分たちには想像できないほどのむごさで、当時の人たちはすごいなと思いました。」といった当たり障りのない感想を書いて終わり。私は心の中で「こんなやり方で、あの時のことを自分からもっと知ろうとする人は何人いるんだろう。私たちが真剣にならなかったら、ばあちゃんたちの苦しい記憶はこれからどうなっていくの？」とは思いつつ、結局誰にも何も言えず何も行動できない。ただの平和な世しか知らない、平和ボケした無力な人間。私にできることは何なのか、という問いの答えは何年も見つからなかった。

しかし、手紙の中で玉木さんは「私達実体験者にはもう時間が有りません。でも、貴方が居る、受け継ぐ使命感に溢れる貴方が居る、有難う貴方の成長を楽しみにしております。」という言葉を下さった。そして、私たちが学んできたあの時の事と平和の大切さを後世にも伝え続けてほしい、と。

私たちができることは、この記憶と想いをいつまでも絶やさないこと。そっくりそのまま伝えられなくてどうしよう、なんて迷うのは時間の無駄だと気づかされた。私たちには若さがある。行動できる力がある。受け継いだ記憶と想いを後世へ残せるかは私たちの行動次第だ。玉木さんはきっと、この冊子とともに私に想いを託してくれたのだろう。だから、私に託された未来は、私が必ず護る。大切なこの一冊と曾祖母の記憶を胸に抱えて。